「遊び」のできる親たちを養成する

埼玉県北本市

あそびの学校

「みんな怖がっているから、へっぴり腰になっているけれど、割るものに対し、からだを正面、平行に持っていくんだよ」とナタを担当した西條覚さん、「ナイフを動かすのではなく、竹を動かすんだ」とナイフ、キリを担当した吉田勲さん、「たて引きは目の粗いほうで」とノコギリを担当した野本勝美さん。そして、「刃物を人に渡すときには、刃先を手前に」「刃物を持つ手は、軍手をはずして素手で」「周りに人がいないことを確かめて」と基本的なことを子どもたちに教えていく。テントのなかでは、代表の平田正昭さんが小学二年生以下の子どもたちとその親御さんと一緒に、ハサミで牛乳パックを切り刻んで、それを燃料にして飯ごうでご飯を炊いたり、竹を使っての笛づくりの指導をしている。

事前の打ち合わせでは、刃物を扱うことでもあり、三回注意しても言うことを聞かなかったら「手を上げる」ことも決めていたが、数名の子が怒られただけで、手を上げるまでにはいたらなかった。

あそびの学校の年間のプログラムは、今回の「刃物・火のつけ方の基本を学ぶ」をはじめ、救助訓練までを体験する「プールで水遊び」「サイクリングで野外料理」など七月から翌年一月まで十回の講座が組まれている。参加者は五十名ほどの小学生以下の子どもたちとその親御さんたち。

平成二年、北本市青少年育成市民会議を母

体にして生まれたあそびの学校が当初目指したのは、「家庭で教えられないこと」「学校ではできないこと」「子どもたちがやって楽しいこと」を子どもたちに経験してもらうこと。具体的なプログラムをつくる上で、基本にしたのは、平田さんたち自身が、ポケットに「肥後の守」を入れ、野山を夢中になって駆け回って遊んでいた子どものころの数々の体験。そんな中から子どもたちに生きる力を培ってほしいと考えた。

しかし長い間、子どもたちにこのような体験を仕組んでいくなかで、疑問に感ずることもあった。それは、子どもに遊びを教えられない親たちの存在。「同じ小学六年生でも、随分技量が違う」と、この日、ナイフ・キリを担当した吉田さんがいみじくも感想を漏らすように、子どもの刃物の扱い方にも随分差がある。これは、とりもなおさず、親の子どもの日ごろの接し方が原因。むしろ親自身が刃物だけでなく、遊び方を子どもに教えられないケースがあること。

そんなことから平成五年からは、子どもたちだけでなく親たちも取り込みあそびの学校を開講していたが、十三年には、親を対象にした遊びスト初級養成講座を開設。そのなかで、講座修了生の数名は、新たにあそびの学校のメンバーとなった。今回でも、十人ほどの親御さんたちが、子どもたちと一緒に竹での笛作りに挑戦していた。子どもそっちのけ

で、竹笛を鳴らすことに夢中になっている若いお母さんたちを見て、平田さんが「親自身が夢中にならないと子どもを夢中にさせられない」と眼を細める。

今年の七月、この遊びストについて、「正式に」認定制度を設けた。「ロープ」「刃物」「工作」「火」などの遊びの項目に加え、「救急」「マネジメント」など八項目、それぞれの細目三十九項目について、どの程度できるかをテストし、初級、三級、二級、一級、そしてマイスターの五段階に認定しようというもの。例えば、「料理」の「ごはん」の項目では、「お釜でご飯が炊ける」が初級、「飯ごうでご飯が炊ける」が三級、「ビニール袋でご飯が炊ける」が二級、「竹筒・ジュース缶等でご飯が炊ける」が一級、そして「指導できる」がマイスターといった具合だ。マイスターは各項目の技量が卓越していることはもちろんだが、あわせて、人に教えるという指導力が要求される。冒頭の西條さんたちは、いずれもマイスターの称号を持っている。同会では、この認定制度の商標登録を特許庁に申請したという。「ここ北本から『遊びスト』を全国に発信していきたい」と平田さんは抱負を語る。

連絡先
北本市市教育委員会
北本市本町1-111
TEL　048-591-1111